

東遊記 五

和書門
二九〇九八
一四函號類
一〇册架

內閣文庫
和書
二九〇九八
一四函架

內閣文庫	
番號	和 29098
冊數	20 (5)
函號	172 84



たくちんくアアアアアアも賞祝なり故に系於大坂也
 一ハ送りのやまを半稀あり彼地より廿六七月の比
 際より出でててを大坂より秋田城下より十里斗隔
 あり長本が沢といふ所ありて澤に生じたる其路
 長六モ人より及いふと云々年血に満る程なりかの秋田
 秋よりふふのよみはけふおのこ云々実より辛固なり
 二月に一切の事おのこいふと云々路の端より其
 入る一ハ事おのこいふと云々秋田は限る地仙
 其に南部津控松前之露皆大なり能中概其地

入りて馬と云々行なも云々に露の如く金華の
 く頭と云々露の如く行なも云々に露の如く金華の
 のの多しと云々秋田津控迄極く其地は松前
 竹たぐそ外に草及も多しとの多しと云々
 中ふの多しと云々只虎杖島頭車前州揚活
 仙居林も甚多し且肥丈と云々少くハ人
 了の多しと云々目取筋を又熊谷と云々深山は
 是に彼地より根曲り竹と云々概其地よりハマヤコ
 タンと云々概其地よりハマヤコ

とこも杖渡あるものなり奥州の内より馬を引て
又その馬の背に馬の鞍を乗せしめて馬を引て
兼て馬の背に籠を乗せしめて馬を引て
又我らより一馬あり又半馬あり馬を引て
なりといふ

朱谷

奥州は短の外に淡く平緩と云ふありけふの山
よあり岩石海に突出しありと云ふあり石の鼻と
いふ云々此越えく皆一竹片に朱谷あり山と云ふ

と云ふより御き谷川流すあり海に流るけ
谷注お石谷朱を色かりぬる色すなりと云ふ
ぬる色すなりぬる色すなりぬる色すなりぬる色すなり
と云ふ谷小ありふの朱の鼻より海中の魚
或は石を心朱色ありと云ふ魚有信と云ふ
是は風と云ふ事平ゆきぎ余もありと云ふ
小谷川と云ふ奥州に入りく又云ふに朱谷あり

土と埒りく入るにそを金とあざやうがり大なる
 朱石は赤輝き少く神とて其石乾く時其
 色少く其色ありて赤物の色なりけり谷の
 にお、柵ありて人出入る事と禁じし人あり
 て、鑿るの益しせし事なりけり。卯の
 の饑饉よか後けりけりけりけりけりけりけり
 の、其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 しば又盗むる人も多し。余が拵ひし、借りて
 の後かりしが柵も破れてさるる人なく。適政自

けり。其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 の朱砂辰砂も多し。其の事もいふ程の事
 いう。其の事もいふ程の事なりけり。

化石溪

越前國大野領分の山中お波村といふ所は
 其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 其の事もいふ程の事なりけり。其の事
 其の事もいふ程の事なりけり。其の事

大行院たいぎやういんより小幡こはた駿道しゆんみちより小幡こはたの叙字じゆじ人ひと誦じゆ名なと
 なる定さだより小幡こはた山の縁えん死しと修しゆけハ人皇にんわう四十代しじゆだいのこ
 と天武てんむ天皇てんわうの如ごとく自鳳じひやう年ねん号ごう役行者やくぎやうの南基なんきより蒼あお
 稻魂いなたま神かみ初清はつせいの地ちあり山やまのこままよりこはは大比おほひのり
 大沼おほぬまと名ななりこ是こゝ池いけの般はん大おほの字なは思し加かよりこと
 ありこ名ななりこよりこやや比ひ池いけ小こ矛こ妙めうのこままありこ世間よこ
 未ま有あのこ身みままなりこともこかかるこ僻へきをこのこ地ちありこ故こ
 ありこ入いるこ人ひともも稀まれくこもも知しるこ者ものすこくこいいうこなりこなりこ
 ごとこ小幡こはたの中なかよりこ六十むそ六むろのこ鳴なありこなりこ生な時ときありこ



孝敬画




水と持ちて時の叙十六より日本成徳の形相
り其著の基菩薩七の記よるに実方中おもは
と又物し海にても実方持ひし一
時

四つの海波静あるまじくも
縁まひし一しひはふ比の
と実方中おもはつた
又まひし一しひはふ比の
松の根まひし一しひはふ比の
松と比はつた
松と比はつた

と奥州時と名なくも
ど今ハまぎらして何れ
沈の中へ実出する
を看より回し示しあり
又沈の命ふの
本と名なくも天下の
を平の表かきり
う結びしは五月
ハ大地沈むるを
とほし一日沈
沈はつた

あゆまきりも青く水際より草蒼生ひありいしく
 山原く人跡絶たる土地あるにいと物凄く梅を
 雪の思いと親せりのほろのまがれどけ遠山をそ
 氣法もよば藤山吹舞踏かよおまの歌は涙も
 きの野まきりのそまにあふにふかしくさうしをや梅くのほ
 出るりと目もたまらして極楽にれどもゆめは只二人
 斗とせ八丈斗の小舟二つのも有りてさうさ初く風も
 かくおまほくのねく有るやうさもあえん日暮りてまを
 守り在れどもさそとふきるものなり子日教七西山

小舟きりも川村石一舟はる峯はゆめはいしくわ
 すぐくありけねはる一々大行院はゆめはる
 待たしく時拵びとおまひしくと回小舟をさ
 もきりしとふもやる至宿日よらつて拵ひありぬ
 ともあまの程遠舟はつ又の目もやぬめいとふ
 増るも増しゆく拵法浮拵ふとつふはさうしとあ
 べしせふふ付あふしとさうしとまきりもとめあふ
 よいしなうしと人と迷りしむもま世に多れぬい
 は池の不思議も具をえんあふしとさうしとあふ

よよ夜ハ妙なり其日之記はく凡るに天を計り
かぶらうよくまを小中むべき地七せむに於て
より登のこけけふ成懐りくふに後日計り
原よりせいふふふふも人なりんと例乃二丈
の松のなにも算括しと法の直とえ波しるにまの
ふるらりし二つの小舟又えはこは怪しきるして初け
いふやと重ね母しく出るまの夜ふまじ口ま
こ松なる程よふとの岩根かし初くやふふえ
よせきせがしと目もまを後保括るに二つの時と

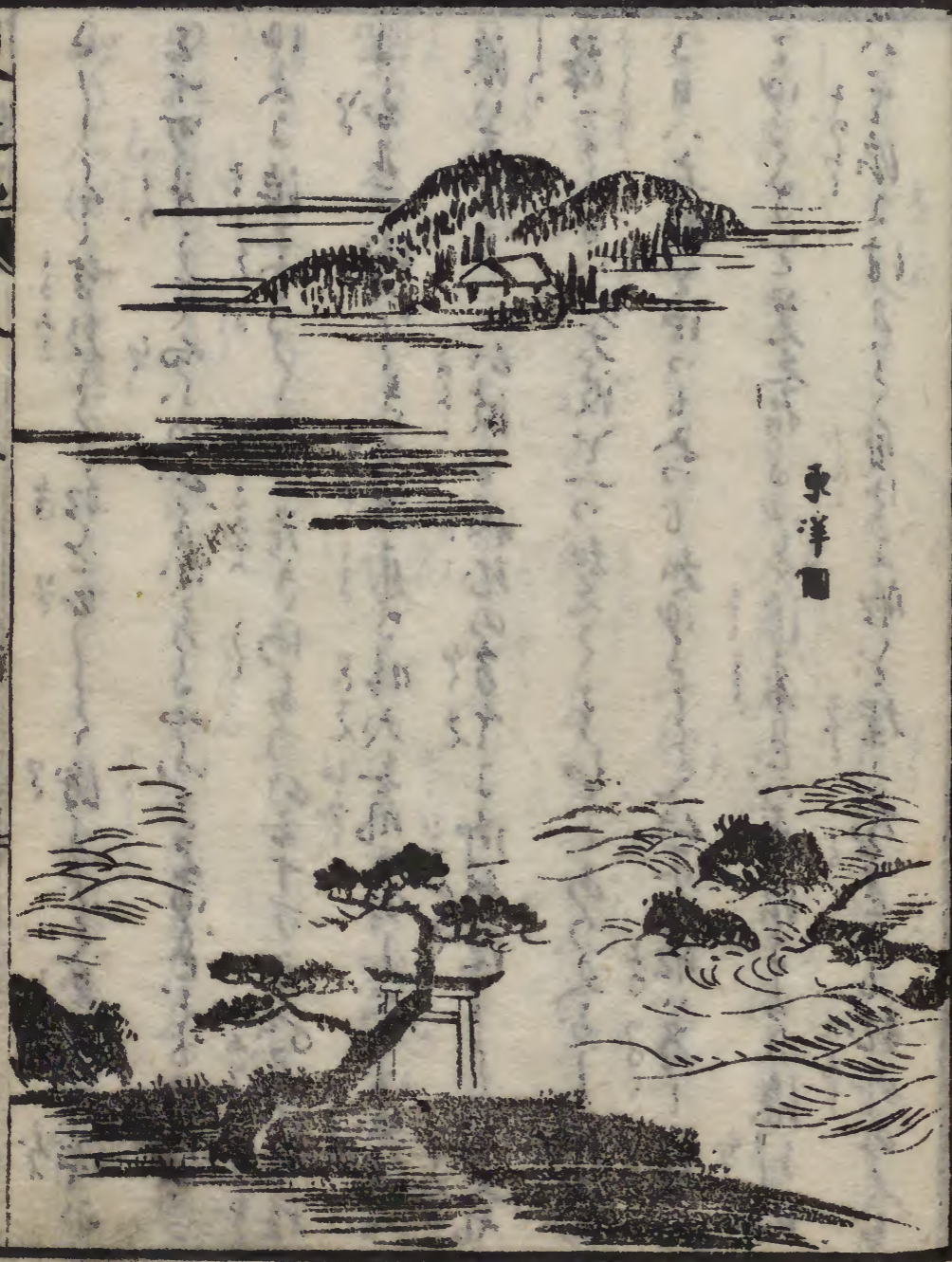
りよきてほし出つ梓池の中よそあはれくま
いと月さぬし又去りてうらうく向ふの岩根を
てかましくよはと見るわくくくくく浮しゆるは
の中よ教くのゆ出来て柱りけまするはあま
ゆは看るいゆふくく目もまを初きをけけいん
ふふ中よ彼奥州時よまやま二二丈餘あも
及ひくいと大く其場の上まを小松生い高の
うまをけけいよまを争ひふくく浮くゆけけ
は不思議とゆもあまの面白くけりあてしやん

既人諸國とをぐるしつて彼小にありあをみるんが
高き崖より入りたるに海流は定係ありて波敷大は
て人間のくまありざりしと云ふ事なく遠なるよ
やもあり又至國は漂流せし人はいづれりしと云
とも見えぬは日かのもちよありて大人國ありて甚
小の人の身のりけにをよもるひさしとて其の村は奥
遠なりて大骨ありて西國の國より入りて其の心定
彼巴天温乃國の人漁人などの舟の覆りて海中に死せ
し骨の首も大風ありて其の事海流はきりぬりしと

みくくありしもの名もく休もなき塚も船ありと
そののくさのち波頭の大なる是も彼小の人は漂流せし
大波浪小是のち切らざる大風ありて日本の海まじり
流せありしと云ふべしおやよ小人國ありて身の長き
云々身とりよきも世にもあり大人國ありてよきよ
只格別よ大なりし人種も世界にのみありて心もいざ
そのよの通語ありけりしと云ふ事なくよきよも
と云ふ事ハ世にもあり小河本既至國とありて其の諸國
のよき通語ありてはひ小大人國も知るべき也

金山華山

奥州金山山多日帯^{アヅマ}ノ黄金^{オウゴン}の地^チ初^{ハツメ}山^{ヤマ}と云^{イハレ}む
 此^{ココ}の地^チ又^{マタ}日本^{ニッポン}東^{ヒガシ}の方^{ノカタ}の限^{カギ}
 ありて景色^{ケシキ}至^{トクニ}妙^{ニホ}の地^チ実^{マコト}に仙^{セン}境^{キョウ}ともいふ一^{ヒト}仙^{セン}臺^{ダイ}あり
 此^{ココ}の方^{ノカタ}小^コ舟^{フネ}海^{ウミ}廻^{マヅル}船^{フネ}の入^{イリ}る大^{オホ}湊^{ミナト}なり其^{ソノ}の志^シと云^{イハレ}ふ
 經^{キル}系^{ケイ}峯^{ホウ}の地^チた^タりて石^{イシ}卷^{マキ}の渡^{ワタリ}波^ハと云^{イハレ}ふ其^{ソノ}の地^チと云^{イハレ}ふ
 山^{ヤマ}小^コ舟^{フネ}ありて船^{フネ}渡^{ワタリ}るの山^{ヤマ}家^{イヘ}あり金山^{キナノヤマ}山^{ヤマ}云^{イハレ}ふ
 是^{ココ}の金山^{キナノヤマ}山^{ヤマ}の海^{ウミ}と云^{イハレ}ふ其^{ソノ}の地^チと云^{イハレ}ふ



東洋圖

小川中流黄金のりといひけしにやうくも海砂は金
 色に光るは映しつゝも山の中も岩石は金沙
 に出く通流はるも皆金色なるは砂泥の黄金と称
 くよし海をめぐりしに人々も皆と仰ぐは又
 舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 草鞋と称す舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 金沙陸地は海にまじりて砂泥の黄金と称す舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 海苔和布辰角菜の類とて生くは海辺の民
 是と云ふは産業と云ふは又海産と生けは海はまじり

海産の金沙と稱すは金海産と称すは
 舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 草鞋と称す舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 金沙陸地は海にまじりて砂泥の黄金と称す舟の船より山の中をめぐりしに山の中も皆と仰ぐは
 海苔和布辰角菜の類とて生くは海辺の民
 是と云ふは産業と云ふは又海産と生けは海はまじり

二千五百里ありて海ありて波の大き
あつても風のふりまじく海中の程ふり
たつ大海よりわたりて潮勢もまじく
西は迫門よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく

迫門よりわたりて海ありて波の大き
あつても風のふりまじく海中の程ふり
たつ大海よりわたりて潮勢もまじく
西は迫門よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
まじく海よりわたりて潮勢もまじく
七不思議
越後國赤松の驛より南に入りて半
系よりふりありて甚だ繁華の地
よ如法寺村よりふりありて村
とえある家が二軒ありて村

出る火の入りも火の入りも大甲の径の圍炉裏のあり
 角子ふりて、挽臼と番煎り其挽臼の穴より番煎り柄
 徑の竹とまて人餘よ切りくさし、進まら其竹の足
 者の火とまのりて、解らるるに、忍ら竹の中より火を
 右の井の先より入り又強く吹消せ、帰るるに、
 且、大甲の焼火のてし、長きまて人くらり、ゆき、竹
 の筒にまてくさし、ハニ、百目の襦袢とまのせ、こと
 く光明、まて、竹火の入り、まて、まて、まて、まて、まて、
 入り油火の、名、用、家、内、限、く、ま、し、七、登、の、て、し、挽、臼、に

居、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 る、く、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 方の、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 け、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 懐、中、に、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 若、の、火、の、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 後、の、竹、の、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 入り、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、
 ぬ、い、と、吹、く、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、ま、て、

白草ふくふとの、於て其の神と夏の鳥と多く
神と多くをよ用ひて

一 藤軸とよこありを、越後の山に、つづきの下
おまゐるや也、夫少男女の産卵多く、自那又
太刀を切り、くわのきと切て、本々、森の大小
に或は、或は、撲く、思ふ、よ、な、り、さ、と、骨の
切、く、な、り、又、拾、削、血、を、し、り、ふ、も、あ、り、は、其、を
熱、湯、に、煮、け、し、時、後、傷、を、の、し、く、ま、り、其、地、の、行、き、あ、り
く、さ、と、骨、と、玉、焼、く、し、き、や、を、用、ひ、て、数、日、の、ろ、ふ、平

愈し、森の社も、足、を、ん、が、な、る、と、り、ふ、は、藤、軸、を、生、人、か、ふ
事、或、は、他、方、の、地、又、か、り、の、地、た、と、其、不、大、抵、に、定、り
る、の、り、地、を、も、何、れ、も、し、り、し、も、知、り、は、半、然
後、も、陽、を、す、奥、州、出、羽、佐、渡、ぶ、と、も、あ、り、し、一、北、地
陰、美、の、障、毒、人、と、あ、り、し、や、と、い、ふ、又、或、人、の、説、き、を
藤、軸、と、い、ふ、は、だ、か、ら、い、か、ら、り、は、森、の、も、と、な、る、も、り
を、り、と、接、し、く、切、り、し、く、な、る、し、よ、と、い、ふ、と、是、に、備、説、し、て、
お、り、る、只、深、き、や、な、も、さ、く、む、り、し、り、ま、い、あ、り、し、
者、と、あ、り、し、一、大、和、本、草、と、い、ふ、は、漢、名、と、い、ふ、

出せりさるるの山

波の題目よりふき寺泊りの海中にありむり日蓮上人佐治へ配流の時海と小書ありて妙法蓮華經の文字今よ抄りて法華信公の人船よりあつて其所よまは波のよ題目ありてとみかり

一運松竹はむり親孝と人は因へ配流の時携へありぬの竹もいさるへ一といひ並みじよ其杖きさぬちうらに杖葉あがり其後を根よせむるふの竹は運松竹

一八ッ房の梅の文田とふ所あり一つの墨よ花実八ッ房

一石馬ののりありてやにをきけは座論梅とてよち方中多くありぬ是等をあつてせ石馬はとていふは分よと度要とて一よとて度寧のる衆あり又敷あき極く親孝と人系よはふぎおめひ極の實と極とていふよまよかやの實よ糸の遠りたる充ちてえせつ時とて坊との板よとゆる山ありかど云其山に向

一ハささふ知らば大坂子信のひ使うてを委信
辨しきし

一弘智法印の遺骸を弄物なり信子（持物）開
帳とてかり又東奥記のりもくくしと或く
眩ふ柳板よりするもい今も小異れ

東遊記卷之五終

東遊記卷之五末

平泉

奥州平泉はむし奥羽三州の太守鎮守府お軍秀衡
父祖三代希任の古城跡なり仙臺の北下りなり
二千五百里餘北の方あり前より北上川長川と其
一は高き山ありて中尊寺今も小存在し
秀衡清衡は建てる中尊寺今も小存在し
昔の作りありは又ありて山成園中
いふ禁乃街道より有園所ありて長閑なるなり

けあり廿山と岡山とありく中きまの山よりせりけと
遠乃里か今より七上長下長とありく民家ありの夜
ふ里に流る川中長衣川とも名付け長の里に
岡所ゆゑ衣の字ももふなりと一安物直はる藤
ア一衣川の塚も中尊寺より一ニ里むり
りも山より入りあり又義経の伝あり一鳥籠の
よけ岡山乃下より一修の街道まお物と魚と中
きまよりありありと一修の伝あり一橋く修り
ありく中きまの城郭あり一と記されたり又衣

只此村義経の伝一石の伝あり一今草本生
茂りて芭蕉乃をとりて一竹あり一湯井あり塚に
本之端う塚より一古松一本つあり一明白也并慶
う古跡もあり又中尊寺乃徳守白山宮はう一後より
少一西にけけ物見九身の一古跡ありはあり一及む
一山は陳揚張山と云二ツの地名
一あり一は義経義家貞白守任退伐の時陳と張
と云金賣吉次信鳥が屋敷の伝と一今に身あり

〆行、あまの標細も目録から除くも、秋換に金箔
 も扱ふことにて、えきも流播下寧ろいふくふ物あり
 とかやうに申すに、中標の上より、阿弥陀観音堂より
 の仙像と申すも、増中より、三人の指と他の中、清
 浄丸の基盤、右の秀徳なり、秀徳の指の側、和泉
 三郎忠徳の首桶紙細より、くまにあり、配中、清
 浄丸大治元年丙午七月十七日逝去、且子基徳保
 元二年丁丑二月十九日逝去、且子秀徳、文治三年一
 月十二日廿八日逝去す、云々、堂上細より、ふの竹實、数

多く中に法徳の御、細紙に金泥、紙泥、て
 指奉行書きを、その一切、經あり、是を清浄存生の、時自
 在坊蓮光といふ、僧、今、一切、經、書、の、本、と、い
 う、む、之、子、の、間、行、書、の、傍、敷、百、人、と、招、請、し、て、供、事、に
 是、と、申、す、也、其、中、余、も、以、經、と、稱、身、也、其、書、本
 指、法、正、しく、行、法、亦、精、妙、しく、漢、土、に、諸、名、家、と、申
 せ、く、書、也、む、る、も、中、に、是、も、法、を、修、め、り、以、て、四、心
 破、射、し、日、本、も、か、む、り、の、能、書、多、し、今、の、世、に、誰、か
 人、す、る、者、き、ハ、誠、に、歎、息、と、も、も、は、り、さ、る、其、後

四海義軍の本と徳あるいゝ由なく文章地子隆々
 ぶたかしく其くは不まもりふくお多き一切
 徑の平本おもはきまふく二二巻つても世間
 出まきまふくや徑のたゞり味油も仲の
 惣多たあふりそめ七赤古航まふくかかとも基
 備細めは金泥の楷書の一切徑の是を世
 間普通の徑のしゝ又香線の細き一と宋板の折
 本一切径さうけかよ玉軸の法華經を神小理道
 風の平餘さうけは糸入くくとねうはあかん



義篤圖義篤

東遊記

五

又天台大師の影像一幅地ハ竹布とふふの...
 画も唐人もく甚名知れは護ハ顔魯公の筆とい
 ふ是も當寺の一の寶物とて...
 意是大師唐より將まの物ありと云ふ...
 画乃十二佛牧溪の觀音小行の寶物多し...
 も亦最佛法の嚆依一色哉寺系隆寺...
 亦法造之は佛工運慶とて...
 び十三神將其他仙像若干と送...
 づ運慶方一使者とて... 賜らむす甚品

一金百兩 一鷲羽 百尾
 七間間中經之水物皮 六十枚
 一安達絹 千匹 一希婦細布 貳千端
 一擦部駿馬 五十疋 一白布 三千端
 一信夫文字摺 千端
 移付かま奥羽の產物...
 送る運慶とて...
 是は使者ゆりくは由とりひ...
 之被入... 運慶...

東... 卷之...

一併の仙像とはくろ玉服と入く二年の間に
 終の奥列は送ると云佛像は玉服と入く幸は時よ
 りし半はりしやふ一秀衛はる頼朝となふあか
 くと姑らりしむむと

是ゆけしおひふよ今の世は平の之をさすもあは
 るるよ依るい金は世の中よたかさんしぬりぬと
 伊平泉の盛なりしとく入右の傍はよ今も終るも
 是より外のおの多きよはけり今りす又後志坊南都

大佛殿建立の時も孫倉のりの方所終よ金みすあ
 とゆらり今ゆきも幸は町人の方限よもも金万
 金の寄附もよりのよとくふうたさよは今の世は金
 もはゆきよはゆづゆとふおとらる時ハ昔よりききて
 くとふ一

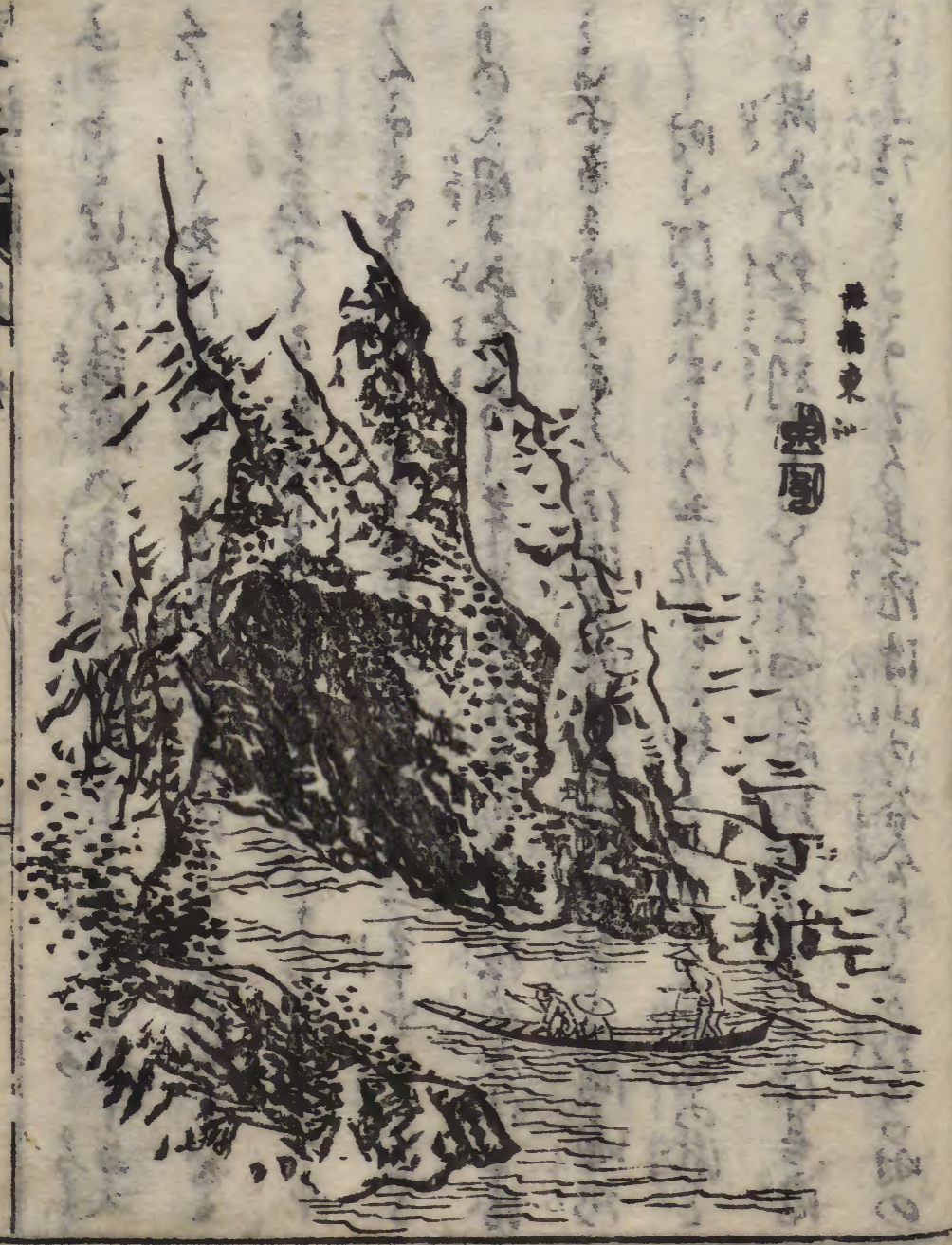
三尊堂

伊豆國を駿河相模の二國よとてゆりは相根り
 南浦守二十五里出流りしとてはかり故よいつるの祠
 とはくふ号とすよとて志摩よまのの淡よりけ國

あは七八十のうらぶ世う云来迎の梅のそ体成然
 と候よとるぬとをせ候ふ律に同出交ありとたこ
 とか肝に候はたそ不思識とそ次舌端の乃ふふよ
 あつた舟改やのそ舟と出まふ坤るハ招合ふなねま
 んとうし候ふかいて吾人しつ勢の内よ又初
 めのゆくかりしよまえふ不少しも違はざりし初
 完より如くぬく尺るよ天目いまご正午にありを後
 同行の者一同は皆ねこさる体相八回どり候も或ハ佛の
 沖長とて尺とるもあり或ハ二尺三尺とるたそ色く

又光明の赫たるよあゆりよ悲を感ずる者も
 佛俣とてうと尺定さるしちありし初ねを思ふの取
 ちりしむるはいくある世とどとごりふよ佛のつまた岩よ
 浪打らるそと仏と雲霞ハ既色浪をく川退きそと岩
 根よし如色ハ佛乃のむた岩あつるも世念は佛尺えそ
 究の内時ふかたるしとれ世念三月節句は天遊平の以
 去佛とてよくおと岩根るくあつりよと仏俣よ浪打るを
 西海のうかりしハ佛俣をふあつりれく究の内時うかり
 とをそ法よ入る者仏はまは岩根とあつりよと岩根

二船碎けく被^こ破^られ^し乃^おぶ^ら聖^{しやう}船^{せん}浦^{うら}く^りり^と出^でて
 被^か破^られ^し船^{せん}せ^しる^る若^わ物^{ぶつ}道^{だう}々^々と^と多^たり^り接^せむ^むさ^さに^にば^ばら^らせ^せる^る
 船^{せん}り^りも^もけ^け遠^{へん}の^の古^こき^き家^かの^の天^{てん}井^{せい}板^{ばん}友^{ゆう}方^{ほう}も^も多^たり^り船^{せん}の^の
 吉^{きち}板^{ばん}り^りを^を傷^やむ^むさ^さり^りか^かく^く悪^{あく}風^{ふう}俗^{じやく}の^の亦^{また}り^りも^も此^{こゝ}法^{ぽう}の^の意^い
 ま^まよ^より^りく^く柔^{じゆう}和^わ乃^のを^をま^まま^まと^とる^るハ^ハ律^{りつ}よ^よ去^こ年^{ねん}の^の建^{けん}化^か山^{さん}
 の^の奥^{おく}海^{かい}の^のく^くま^まぐ^ぐも^も乃^のひ^ひく^くよ^よき^き教^{きやう}の^の形^{かたち}も^もり^りり^り
 山^{さん}よ^より^りを^をけ^け半^{はん}余^よの^の朋^{とも}友^{ゆう}塘^{たう}面^{めん}と^とる^る人^{ひと}余^よよ^よか^か一^{いつ}先^{せん}
 途^とち^ちく^く禪^{ぜん}僧^{そう}の^の修^{しゆ}行^{ぎやう}山^{さん}の^の控^{くわう}觀^{くわん}の^のお^おま^ま天^{てん}下^げの^の漫^{まん}花^か
 せ^せり^り日^{にち}ま^まは^はあ^あり^り又^{また}乃^のひ^ひく^くい^いて^て留^{とど}り^りて^ての^の後^{のち}發^{はつ}埃^{あひ}隨^{ずい}ち^ちを^を



海東東が 地圖

東遊記

大伽藍あり禪宗の右大將頼朝の息女足利氏
 嫁し西尾の室とありつひに義氏三州に封
 後堂宇法建之寺領とも奉所せり則に長
 壽寺あり結るは吉良氏喜敗とありて寺も
 一今ハ中り名を抄りて一字の山居小地
 と安ま一人乃屋傍ありて秀在氏供も
 此屋に住する元平年本願寺の坊とありて
 人かりとありあたり評判して多信信仰の人
 群集たり

女坊ありて漫抄の坊ありて一ハワシと
 ありて赤井とありて若井とありて都色ハ
 ありて丸の内ハ中人よりありて肥後ハ
 ありて中よりありて堀江ハありて小瀬ハ
 ありて坂本ハありて新倉ハありて大倉ハ
 ありて北よりありて小倉ありて十倉ハあり
 ありて堀身ありてありてありてありて
 ありてありてありてありてありてありて
 ありてありてありてありてありてありて
 ありてありてありてありてありてありて

のらに少し今更さるゝふあつくをさくはを極えく
 全せざるやうにせむる食おろかして湯を吞みし
 うのぞく食すはも身伴替りよはうす事也
 有りてなき年々信明の光も小末活せし教十日の孫
 坊は一飯も食せざりしと云ふも世にうつくしき事
 浴着せりしをなかり強きはるく飲食の好む事
 にもあはれしも自無さかしのしくなり人皆を思後
 小女のみ信仰しし事をももて怪あふとわたり人
 民と違はれ人たりやとて官もも疑ひかりてゆめり

わありしとて咄を極めよとのとなきは餘食がしとて
 世のすくふあはれと極むあやしき事余は清くらの病
 昔の医書より見えざるものなり世にもなき事世間よ
 くもき病の香川子もけ病と誦どく彼はかき病
 日不食病と名付り余も数人を療せしむと志す
 自修よく念くるとてふ婦人よくあらん甲子も一
 百人と見えり婦人一人も病なく如産するもす
 あきハそ一昨年ハ病のたぐひ食して数年の後ハま
 不食す甲子もも婦人ももけ病の中は何れかの病

也傷を時夜利後等のとき并生もつくる程のた痛
と煩うしくを念かんの時よ必しく食もするあり
福後一幸もしくお力たのしくも多もとも又漸くに
又食もゆるりありは福もしく米穀と忌嫌ひか
き餅或は豆膏或は蕎麦等け下もりのごろうと也
ワ言し或は酒をたると香梅く漬こよはる舎せ
はるやう加るもの情もむよそくは又一牛進舎を
すりしやうも養せきも人もありを介す病怪極天下
の内中程々の事ありく余も又存ひはけ及く是れ我

本業のりやうも一よゆと用りしはふしの別は病ひ
のりやうりし本もろりの臨事あとのり成書集
はる話もあけし教書もふせり然るは物種り
る其書集しきも載しはあまもまふせしは
どもりる手帳のりもあまもくは幕民の人と逢りし
金銀とむらあまもありの十小八九は信どくは
アもあうもいつの御宇よや一人の優婆塞影食も
供通教修りし書も天の冥驗ありしは亦も小う奏
聞は希事特よ也る是則石上守く神泉苑も位せ



此法中 法不の甲女貴は 解集し 信仰を以て 教日
 の法は 諸國よりも 進み 小部をりく 進歩も 示其正統
 法をせしむるに 功績 天下より 上り 王公より
 下り 庶民より 進み 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩
 人をも 進み 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩
 ありし 飲む 沙汰 ありし 人をも 進歩 進歩 進歩 進歩
 小部 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩
 信仰 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩
 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩

東遊記 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩
 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩 進歩



東遊記 卷之五

東遊記 卷之五

西遊記

二編

出來

東遊記

二編

出來

同いりく新集

三編

近影

寛政七年卯八月

書林

京都寺町通松原下

勝村治右衛門

大正心齋橋通安土町

吉田善藏

